

Ⅳ.「やまぐち型 B 型チャレンジプログラム」の実施報告

- 1.「やまぐち型 B 型チャレンジプログラム」の内容および実施状況..... 80
- 2. B 型チャレンジプログラムの検討結果..... 83

Ⅰ.「やまぐち型 B 型チャレンジプログラム」の内容および実施状況

■ B 型チャレンジプログラムとは

「やまぐち型 B 型チャレンジプログラム（以下、B 型チャレンジプログラム）」は、令和元年度の B 型チャレンジ事業の成果と課題を受け、事業の活性化を図るために始めた新たな取り組みである。現在、就労継続支援B型事業所を利用している者が、一般就労への意欲・自信を高め、それを維持して、就労移行支援事業や一般就労につなげていくような支援プログラムを、開発・試行するものである。就労継続支援B型事業所を中心にメンバーを募って、「プロジェクトチーム」を組織し、検討した。本来であれば、試行・実施まで行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で、一部しか実行できていない。

プロジェクトチームを組織して実施した狙いは、就労支援の現場で働く支援者が、施設・事業所の枠を超えて課題やアイデアを協議し、共有することで、山口県の地域特性や現場の事情にマッチした、より実効性の高いプログラムの開発・試行ができると判断したためである。さらに、就労継続支援事業所の利用者を一般就労につなげる土壌づくりと、支援者のネットワーク形成へと発展していく可能性を期待した。

■ プロジェクトチームの構成メンバー

就労継続支援 B 型事業所のほかに、相談支援や生活介護等の事業所に協力を得て、メンバーを選定した。勤務時間外に会議を開催するため、事務局に近い山口市、防府市を中心に構成した。メンバーは以下の通りである。

氏名	事業種別	事業所名
山田 正寛	就労継続支援B型	あおぞら
梅田 和平	就労継続支援B型	ふしのエコ事業所
槌田 貴弘	就労継続支援B型他	心促福祉作業センター
桑原 健介	就労継続支援B型他	シオン多機能事業所
武永 佳世	就労継続支援B型他	ステップあそかの園
松田 佳昭	就労継続支援B型他	鳴滝園
本城 彰	就労継続支援B型他	るりワークス
岡村 隆弘	相談支援	山口県発達障害者支援センターまっぷ
竹原 啓	相談支援	ゆめサポート相談所
古谷 夏子	生活介護	トイロ
古谷 正登	訪問看護	三田尻訪問看護ステーション

■ プロジェクト会議の実施状況と主な内容

当初の予定では、

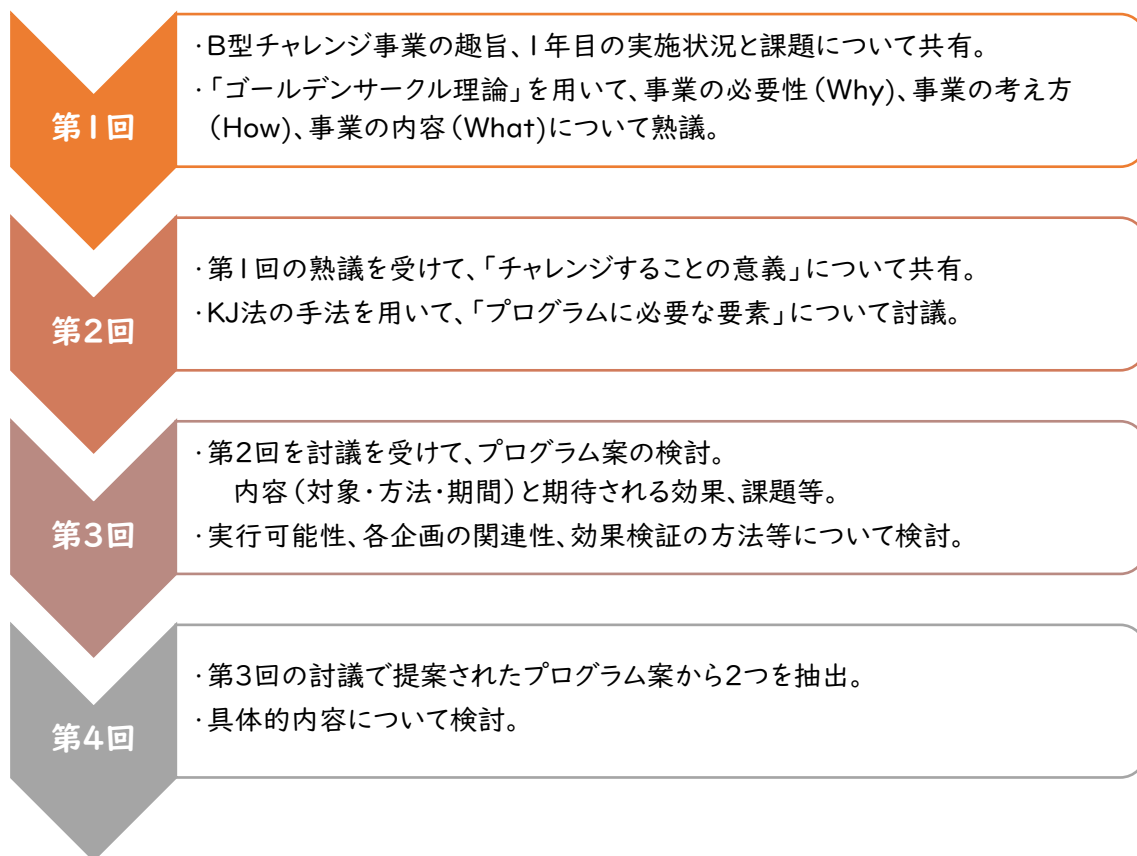
- ① 5月～7月 : 検討会を4～5回開催し、プログラムを立案
- ② 8月～12月 : 支援プログラムの試行に協力できる事業所(利用者)を募ったうえで、試行
- ③ 1月～2月 : 試行結果に基づき、プログラムを再検討

の予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で①を終えた時点で中断となった。その後、①で提案された「PR 動画の作成」のみ、11月～3月に実施した。

日 程		参加者		会 場
月 日	時 間	委員	事務局	
《B型チャレンジ事業の活性化のための検討》				
令和2年6月3日(水)	19:00~21:00	12人	2人	特定非営利活動法人青空
令和2年6月17日(水)	19:00~21:00	12人	3人	特定非営利活動法人青空
令和2年7月1日(水)	19:00~21:00	12人	3人	特定非営利活動法人青空
令和2年7月15日(水)	19:00~21:00	12人	3人	特定非営利活動法人青空
《PR動画作成のための検討》				
令和2年11月19日(木)	19:00~20:00	7人	3人	社会福祉法人るりがくえん るりワークス
令和2年11月25日(水)	16:00~19:00	3人	1人	社会福祉法人ふしの学園 ふしのエコ事業所
令和2年12月1日(火)	19:00~20:00	6人	3人	社会福祉法人るりがくえん るりワークス

■ 「活性化のための検討会（プロジェクト会議）」の流れ

4回の検討会では、B型チャレンジ事業の趣旨と内容、現状の課題を共有したうえで、活性化のためのプログラムを以下の手順で検討した。



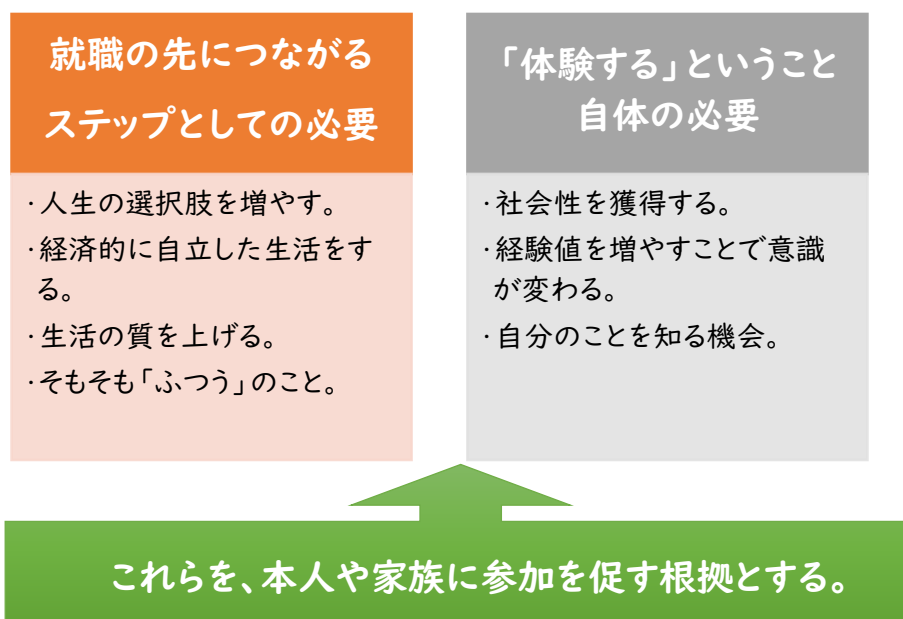
2. B 型チャレンジプログラムの検討結果

1) チャレンジ事業の「必要」の再確認—チャレンジすることがなぜ必要なのか

前年度のチャレンジ事業で、参加者の応募が少なかったことをから、参加を促すためにはどういったこと必要なのかを検討課題とした。そのために、まずは、チャレンジ事業のプログラムを考えるにあたり、そもそもなぜチャレンジすることが必要なのかをメンバー間で共有した。

1点目は「就職の先につながるステップとしての必要」である。「結婚等の人生の楽しみがある」「お金が儲かる」「夢が具体化する」など、より具体的なワードが挙がった。「障害者一般就労移行チャレンジ事業」という名称は、一般就労(=就職)が目指すゴールだという印象を与えがちである。そのため、何のために就職するのか、というビジョンが見えにくい。今後は、就職することだけではなく、就職することで得られる未来を描けるような本人への誘い方を検討する必要がある。

2点目は、「『体験する』ということ自体の必要」である。「人に認められる気持ち」「チャレンジの限界を作らない」「チャレンジすることによって何かを感じることができる」「本人の望みを自分自身で知るチャンス」といったワードが挙がった。これらは、家族や支援者など周囲の人々へ参加を促す際に取り入れたい要素である。



2) プログラムに必要な要素ー「チャレンジしたい」と思ってもらうために必要なこと

次に、「チャレンジしたい」と思ってもらうためには、どのような要素が必要なのかについて検討した。挙げた意見を、大きく2つに分けて整理した。

1つ目は「本人への働きかけで必要な要素」である。「将来のイメージ持てる」では、実際に就職した人の話を聞く、就職後の支援について説明するといった案が挙げた。「企業を知ることができる」では、企業の人に説明を受けるだけでなく、現に働いている人に話を聞くといった案が挙げた。「ステップアップのシステムがある」では、体験実習から就職までのステップと、一方では、チャレンジ事業に参加するまでのショートステップの必要が挙げた。「チャレンジの報酬がある」では、参加することでの賃金、あるいは参加賞としてグッズ等がもらえるといったアイデアが挙げた。

2つ目は「周囲への働きかけで必要な要素」である。応援する仕組みを作るという言葉でも表現された。昨年度チャレンジ事業に参加した事業所から体験談が語られ、チャレンジ事業には事業所や企業にとってもメリットがあるということを、募集の際にも強調した方がよいのではないかといった意見が挙げた。

本人への働きかけで 必要な要素

- ・将来のイメージが持てる
(働く・生活する・就職後)
- ・企業を知ることができる。
- ・ステップアップのシステムがある。
- ・チャレンジの「報酬」がある。
- ・様々な職場が体験できる。
- ・自信・達成感につながる。

周囲への働きかけで 必要な要素

- ・事業所にとってのメリット。
- ・企業にとってのメリット。
- ・家族の意識を変える。
- ・チャレンジを後押しする仕掛けがある。
- ・支援者自身がステップアップできる。

3) 次年度に向けての企画案ーチャレンジ事業の活性化のためのプログラム

参加者および参加事業所の増やすこと、実習後の「意欲」や「自信」を維持し、就労移行事業の利用や就職へつなげていく、といった、昨年度の課題を受け、企画案を検討した。その結果、3つのアイデアが挙がった。

① 一般就労の「実際」を知ってみよう!!

概要	B型チャレンジ事業への参加を促すための研修会で、当事者、家族、B型事業所職員および関係者を対象とした講座。
目的	本事業の目的や内容の周知 新しい働き方の提案 従来の枠にこだわらない働き方の提案(本人・家族・支援者向け) 業務の切り出し等による障害者雇用の可能性の提案(企業向け)
内容	① 現に働いている人の「働く&暮らす」を紹介する。 (映像もしくはパネルディスカッション方式) ② 制作した映像は各事業所に貸し出しを行い、伝達講習のかたちで活用する。

② 企業合同説明会「障がい版キツザニア」

概要	企業(現に障害者を雇用している企業+今後検討している企業)を集めた合同説明会を開催。「体験」+「知る」の組み合わせることで、楽しさを前面に出す。現段階では一般就労に目が向いていない利用者も対象とする。
目的	(本人にとって) 実際に「仕事」を知ること、就労への意欲を高める。 体験することで、「仕事」への自信を高める。 (企業にとって) 障がいのある人と実際に触れて、知ってもらえる
内容	① 広めの会場でブース形式とし、参加者は自由にラウンドできる形とする。 (コロナ対策で密を避ける) ② 各ブースでは、映像を用いたり、体験コーナー、展示コーナーを設けるなどして、「仕事」をイメージしやすくする。 体験の例:段ボールたたみ、皿洗い、解体作業 ③ ゲーム感覚や遊び的な要素を取り入れることで、ハードルが低い導入を心がける。 例:スタンプラリー、ポイント制と景品、本人の名刺、終了証、免許皆伝制服の試着(写真撮影)

③ 見学・説明会、チャレンジ事業の再検討

概要	B 型チャレンジ事業（見学・説明会、チャレンジ実習）をより効果的にするための再検討。
目的	実際の「職場」を知ること、明確なイメージを形成し、就労への意欲を高める。
内容	① 昨年度の方式を踏襲しつつも、可能な限り、複数の職種から選択できるよう、見学会の企業を募る。 ② 選択の幅を広げるために、圏域をまたいだ参加も可能にする。 ③ 事業所の負担を減らすような工夫を検討する。 例：バスを出す、ガイドをつける等。 ④ 企業の側から事業所に出向いてもらい、障がいのある人を知ってもらう機会を作る。

（その他、企画に関連して検討した内容）

- 最も大切にしたいことは、本人にとっても、事業所にとっても、企業にとっても「気軽に」参加できること。
ハードルは低く、楽しく。「ぷち」「お試し」「覗いてみませんか」といったキーワード
※ 気軽さ、遊び的要素を前面に出すと、参加のハードルは下がるが、「次」につながるのか？
※ 「ポイント集め」等が目的化してしまう恐れもある。
※ イベント的な催しで終わってしまうのではないか。
- 固定観念を取り払った斬新な企画（本人だけでなく、支援者も固定観念を持っている）。
- 会場を設ける企画は、東部・西部の2会場とする。
- 「企業」を体験するのか、「仕事」を体験するのかを明確にする必要がある。
- 既存のネットワーク（自立支援協議会等）との連携により、多くの事業所を巻き込むことが必要。
- 周知の方法（チラシ等）を検討する必要がある。
- 報道機関を活用することで、企業の社会的貢献として取り上げてもらえないか（企業へのメリットとなる）。

4) 企画の実現性等に関する検討

3回の検討会が終わった時点で、新型コロナウイルス感染が拡大し、企画をそのまま実施することは難しいという状況に至った。そのため第4回の検討会では、現状のなかでの実現可能性と、そのための変更等について検討した。

(ターゲット)

- 一般就労に無自覚な人にとってのファーストステップ(最初の動機付け)。具体的には、特別支援学校を卒業して、そのまま就労継続支援 B 型事業所を利用した人等。生活介護の利用者も視野に入れる。
- 以前に一般就労していてリタイアした人が再チャレンジするきっかけ。具体的には、生活保護などで働くという意欲を失っている人等。
- 対象を幅広くし、埋もれている人に「働く」というイメージを持ってもらい、就労へのステップに結びつける。具体的には、引きこもり、在宅にいる人。

(コンセプト)

- ハードルを下げて、まずは参加してもらうことを大切にする。その後は、B 型チャレンジ事業(見学・説明会、チャレンジ実習)につなげる。まずは、実習に結びつくような企画が大切。
- 障がいのある本人だけでなく、B 型事業所の職員にとっても、意識を高める、促すという機会にする。
- 「お金を稼ぐ」という意味が分かるような機会を作る。

(実施に向けての留意点)

- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、「集まる」イベントの開催は難しい。「遠隔」でできることの方が、実現可能性が高い。
- 映像にすると、事業所等で観てもらうことが可能で、県全域で参加可能になる。ただし、観るだけでは面白みに欠けるので、プラス α の企画が必要。
例: 技能検定、チャレンジ企画
- 映像の作成では、実際に働いている人の姿を見てもらうことが効果的。ただし、「人」に焦点をあてるのではなく「仕事」に焦点をあてる。
- 「こんな仕事があるんだ」「こんな特技が生かせるんだ」と思ってもらえるような企画を作る。